



TITLE:

<大會抄録>セレウケイアとテース  
ィフオーン: アルシャク朝パルティ  
アとギリシア都市

AUTHOR(S):

春田, 晴郎

---

CITATION:

春田, 晴郎. <大會抄録>セレウケイアとテースィフオーン: アルシャク  
朝パルティアとギリシア都市. 東洋史研究 1996, 55(3): 628-628

ISSUE DATE:

1996-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155014>

RIGHT:

る。當然それによって、王權を支える勢力の基盤も變化し、新たな支持勢力も登場した。それと同時に新たに獲得した領域に對する支配が進行していく。

このように、それまでの地方が新たに中央として再生し、新たに生まれた地方に對して、それを支配する構造が生まれてくる。このような複合的な百濟國家の再編過程を、中央と地方の問題を意識しつつ、追究してみたい。

## セレウケイアとテースイフオーン

——アルシャク朝パルティアとギリシア都市——

春 田 晴 郎

アルシャク朝パルティアの性格については、イラニズムの復興、という視點で語られることが多く、先行するセレウコス朝との關係では、連續性はあまり言及されなくなっている。

セレウコス朝の王都の一つであるティグリス河畔のセレウケイアとその對岸にアルシャク朝が建設したテースイフオーン(クテシフオン)との關係でも、ブリニウスやタキトウスなどの記述に強く影響されて、兩都市をギリシア都市とそれに對抗する王朝の都市、と對立させて記述されていたりする。これは、ギリシア(ヘレニズム)文化を對立的に捉えることで、パルティアにおける前者の吸收攝取という側面を輕視することにも繋がる。

本發表では、アルシャク朝時代におけるセレウケイア——テース

イフオーンの歴史を、セレウケイアやバビロン出土の史料から検討する。そして、兩都市は全く分離したものではなく「複合都市」としての性格も持つこと、アルシャク朝とギリシア都市との關係は紀元後一世紀に變化はするがその前後とも必ずしも兩者は對立してはいないこと、を確認し、この王朝の「セレウコス朝の繼承者」としての側面も重視する必要がある、という説を支持する。

## オスマン朝期カイロの「死者の街」研究序説

大 稔 哲 也

近年、筆者は西暦一二一五世紀のエジプト「死者の街」において、集團による參詣行爲が爆發的流行をみたことを掘り起こさんと努めてきた。しかし、それに引き續くオスマン朝支配下の死者の街の實態については、ほとんど研究も見當たらない。さらにそれがいつ衰微を呈し、現在のように聖者生誕祭の隆盛へと移行していったのかについては、まったく今後の研究に託されていると言えよう。

そこで、今回、オスマン朝期の死者の街を考える上で不可欠の史料となるであろうシェアイビー(Muhammad b. Shu'ayb b. Muḥammad b. Badr al-Dīn b. Aḥmad 'Alī al-Hijāzī al-Shu'aybī)の參詣の書 *Kitāb yashū'at al-'alā Dhīr man dafina bi-Miṣr al-Qahirah min al-Muḥaddathin wa-al-Awliyā' wa-al-Salihin min al-Rijāl wa-al-Nisā'* をおもに取り上げて検討する。本書はカイロ・アズハル圖書館にその寫本が存在することを、その目録か